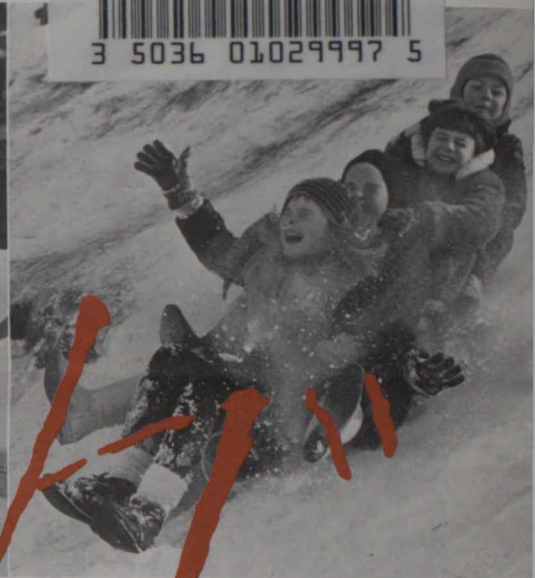


CA1
EA947
B71
#15 Nov. 1977
DOCS



LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01029997 5



ウィンター・スポーツ特集

1977年11月
No. 15

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
DEC 15 1977
OTTAWA
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

トピックス●

- 大蔵大臣経済報告など—2
- カナダのウィンター・スポーツ—3
- カーリングを
したことがありますか—5
- カナダ・スキーマの魅力—6
- 日加を結ぶアイスホッケー—7
- 日系カナダ人を訪ねて—8

書評●

- 「ディーフェンベーカー回顧録」—10
- 「カナダの歴史」

トピックス—12

60984 81800

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

賃金物価統制は四月から解除 雇用創出に努力、経済報告で強調

カナダ連邦政府のクレチエン大蔵大臣は、十月二十日、下院で経済報告を行った。報告の要点は、①賃金物価

統制は来年四月から徐々に解除される②直接雇用創出計画予算四億五千万ドルに一億五千万ドル追加する③来年三月で終わる今年度予算(総額四百五十億ドル)の赤字見積りを今年三月の予想より五〇%上回る九十二億ドルに修正する④経済はほとんど停滞しており、今年の成長率は二%にとどまる予想だが、来年は五%の成長が見込まれる——というもの。

報告は、経済状況の実態、成長の障害要因、インフレ抑制計画の段階的解除、新規財政計画などの項目に分かれている。以下はその概要。

一、インフレ率は多少低下し、賃金上昇も鈍化、また食糧以外の物価上昇も着実に抑えられたものの、食糧の値上げやカナダ・ドルの下落などによる後退もみられた。過去数カ月は生産も伸びず、今年後半に事態が改善されても、今年の国民総生産(GNP)は昨年比二パーセント高ぐらいにとどまるだろう。民間の予測では、来年のGNP上昇率も四ないし五パーセント程度で、これでは失業率を下げるには不十分である。

カナダにおける就業者の数は増えたが、就業を希望する未就業者はそれ以上の速さで増え、失業率は八・三%に達した。雇用を創出し、働きたい人はすべて働けるようにする必要がある。

国際収支の状況もかんばしくない。米

は増大し、今年の貿易黒字高は二十億ドルを越す。しかしもっと大きな黒字が必要だ。観光赤字は大幅に増え、利子、配当などの赤字もますますふくれている。カナダ・ドルが弱まり、下落したのはこのためである。

失業率を着実に引下げするには、五ないし六%の継続的経済成長が必要である。これだけの成長を達成するには、まず輸出と商業投資の拡大が必要だ。国際収支をさらに改善し、観光赤字を減らさなければならぬ。政府支出の増大は抑えられて、消費者支出は経済全体の動きに合わせて拡大できるし、またそうすべきだ。消費者支出の拡大と輸出の増大によって、経済の余力能力を抑え、資本投下の需要を創出するだろう。

一、経済成長の障害要因として、①カナダの海外市場が期待されたほどに伸びなかったこと②インフレにより輸入増大を招来し、製造業関連の雇用が大きく縮小し、観光収入が落込み、工場誘致が停滞したこと③悲観論の横行、などが上げられる。インフレの大きな原因は賃金上昇。賃金抑制によって、上昇率は一九七五年の二〇%から最近では八%に落ち、アメリカと比べてもはや不利な立場にはない。しかしこれまでに失なった分を取戻す必要があり、そのためには繊維のような弱い産業を保護しなければならぬ。また効率的製造業を進展させ、生産性を高めるには関税障壁を上げることが必要だ。カナダ・ドルの下落はカナダの競争力を高めるが、しかしそれは諸問題の基本的解決にはならない。インフレを抑え、価格を競争相手国なみに下げることが肝心だ。悲観論の横行は政治的不安定に因

がある。カナダの統一がはたして守れるかという懸念により、経済困難が一層悪化した。しかしケベックが分離することはまずない。

一、インフレの危険を高めることなく需要を刺激するため、一九七八年四月十四日から賃金物価統制を段階的に解除し、中、低所得者(年収一万五千ドル以下)に對し、所得税を最高百ドルまで減税するほか、雇用創設計画を増やし、政府支出に対する嚴重な抑制を維持する。

一、カナダ・ドルの交換レートに関する政府の政策は、カナダ経済の根本的諸問題の解決を目指すものである。このような政策により、国際収支はさらによくなる。政府は秩序ある状況を維持するため市場に介入したが、カナダの外貨準備高は依然として大きく、それをさらに大幅に補強することも可能である。政府は現在の変動レート政策を続ける考えである。

一、以上のような対策を講じることによって、来年は五%の実質成長が見込まれる。これを上回るには、経済構造を改善する必要がある。政府はすでにその改善に乗り出しているが、投資政策や基本的構造変化などにより、一層の努力がなければならぬ。こうした変化を推進するため、政府は各州政府の協力を求め、産業、労働界などと幅広い協議を行うつもりだ。

カナダ統合問題で特務委員会を設置

ケベック独立問題を抱えるカナダ政府は、国家分裂を防ぐため、「カナダ統合に関する特務委員会」を設置した。この協議会は、ジャン・ルク・ペバン(フ

ランス系前閣僚で現インフレ対策審議会会長、ジョン・ロバーツ(前オンタリオ州首相)の両氏を議長に、八人の委員(ケベック州二人、大西洋地域、オンタリオ州、大平原および北西準州地域、西部およびユーコン準州地域それぞれ一人)からなり、来年一月までカナダ各地を訪れてカナダの将来のあり方について国民の声を聞くとともに、この問題について全国的に討論してもらおうという。

委員会は、カナダが英仏両民族により建国された事実や、カナダの地理的、社会的、経済的状况からみて、連邦制が「最適」であるという観点から、国民の率直な意見に耳を傾け、制度や機構などに改革の必要があれば、その旨政府に進言することになっている。

このほか、文化省はカナダ統合に関する個人や団体からの問合わせに応じるほか、カナダ統一を推進する団体を指導し、また他の省庁と協力して統一に関する諸計画の公報活動をまとめる「カナダ統合公報室」を設置している。

エリザベス女王が施政演説 カナダ統一を呼びかけ

エリザベス女王は十月十八日、カナダ連邦議会の開会式に臨み、カナダ国内の諸問題とその対策について施政演説を行った。その中で、女王は高い失業率とそれに対する雇用創出政策や産業刺激策、輸出の振興、食糧政策、特に北方および北極海におけるエネルギー開発、経済的地域格差の是正などについて触れるほか、国民が謙虚になってお互いを理解し合い、国家の統一を守るよう呼びかけた。



カナダの ウィンター・スポーツ

一年のうち四カ月も雪におおわれているカナダでは、雪や氷を利用したスポーツが盛んである。それも、アイスホッケー、スキー、スノー・モビル・レース、カーリング、そり乗り競走、釣り、スケート……と多彩だ。

数あるウィンター・スポーツのうちでも、カナダ人に最も親しまれているのは、何といってもアイスホッケー。冬になると、小学生からプロの選手まで熱烈なアイスホッケー競技を展開し、国中が興奮のつぼと化する。真にカナダが発明した唯一のもの」と言われているように、カナダで生まれ、カナダで発展したアイスホッケーは、まさにカナダを代表するスポーツといえよう。(アイスホッケーは、十一世紀頃からイギリスやオランダで若者たちが氷結した沼地や川の上で滑っていたスケートと、中世の頃からイギリスなどで草の上を棒切れてポールを追

って遊んでいたフィールド・ホッケーがひとつになったもの。一八五五年のクリスマスの日に、オンタリオ州キングストンに駐屯していたカナダ・ライフル守備隊の隊員が、ブーツにスケートをはめ、フィールド・ホッケーのステッキとラクロス・ゲームのボールを借りてやったのが最初だといわれる。起源は同守備隊にステッキを貸したハリファックス駐屯の守備隊、あるいはモントリオールという説もあるが、いずれにしてもカナダで始まったことには間違いない。)

カナダ全体のアイスホッケー競技人口は、アマチュア・ホッケー協会に登録しているだけで七十万近くにはのぼる。およそ三十人に一人の割合である。この中から数々の優秀な選手が生まれた。元来カナダで組織されたナショナル・ホッケー・リーグ(NHL)をみると、十八チームのうちカナダのチームは三チームにすぎないが(残りはアメリカ)、選手の九五パーセントはカナダで技を磨いたカナダ出身で占める。

アイスホッケーと並んでポピュラーなウィンター・スポーツはスキー。スキー人口はおよそ二百万人―十人に一人―といわれ、カナダ各地では十一月から四月にかけてスキーを楽しむ人々が列をなす。カナディアン・ロッキーマウンテン・バンクーバー近郊、モントリオール近郊を中心に、

山岳(アルペン)スキー用のスキー場(宿泊施設完備)が三百以上もできているほか、これらの滑走コースとつないで、クロスカントリー・スキー路が何百キロにもわたって開発されている。戸外でウィンター・スポーツを楽しむ人々がふえていることから、このような施設は今後

もつと必要となろう。

スキーをするためにわざわざ外国からカナダを訪れる人も増えてきた。外国スキーヤーに特に好評なスキー場は、豪快なスロープと素晴らしいパウダー・スノーで知られるアルバータ州のバンフとジャスパー。ロッキーマウンテンの東端に位置するバンフには、カナダ国内で五指に入る最大規模のスキー場(ダウニルヒル・スキーの最大落差が六一〇メートル以上)を含め、

●世界フィギュア・スケート選手権大会● 来年はオタワで

1978年度世界フィギュア・スケート選手権大会は、来年3月2日から12日まで、カナダの首都オタワで開かれる。この大会には、今年3月の東京大会で活躍したコワレフ(ソ連)、ホフマン(東独)＝以上男子シングル、フラチアン、スミス(共に米国)、ポエツ(東独)＝女子シングル、モイセイワ、ミネコワ(ソ連)、トンプソン、マックスウェル(英国)＝アイスダンス、ロドニナ、ザイチェフ(ソ連)＝ペア、などの一流選手の参加が期待されている。

三つのスキー場がある。そのうち、テンブル・ホワイトホーン・スキー場は三二九二メートルのゴンドラなど、いくつものリフトでむすばれた三つの山面からなり、一日に八千人以上もの人々がすいすいと滑るほど広い。

主要スキー場の中でもつとも高いところ

ろにあるのは、バンクーバーから約百十二キロのウイスラー・マウンテン。一番長いスロープが九・六キロ、ダウンヒル・スキーの最大落差が一三一メートルもある、本格的な山岳スキー場だ。ケベックのモン・トレンブラン・スキー場（モントリオールから北へ一四五キロ）とモン・サンアン・スキー場（ケベック市郊外）も六一〇メートル以上の最大落差をもつ最大規模のスキー場で、



フランス料理などフランス的雰囲気を与える。

スキーやホッケーがカナダのウィンター・スポーツあるいは戸外娯楽のすべてでないことはいままでもない。昔は生存のための技術であったものが、スポーツや余暇活動にとり入れられたものもある。例えば犬ぞり競争。極北のごく一部の地域を除けば、犬ぞりは過去のものとなり、モーター付きトボガンがそれに代わった。

しかしスポーツとしての犬ぞり競争は盛んだ。もちろん雪上車（スノー・モビル）競争もある。

カナダ人なら、老若男女を問わず一度や二度は必ずやるのがスケート。カナダが、数々の世界チャンピオンを生んだ曲すべりを一生懸命に練習する熱心なスケーターもいるが、ほとんどの人はただ楽しむため、あるいはホッケーの腕（足？）をあげるかスピード・スケート大会に参加するためだ。オタワのリドー運河は、冬になると世界最長の人工スケート場（七・二キロ）にかわり、晴れた日には一万を越す人々がスケートを楽しむ。中には運河

雪ぐつ競走

トボガン



もともと北アメリカ北西部のインディアンが、主に食糧や衣類などを運ぶのに用いた幅広の木製ソリ。かばの木の板で作られた厚さ一センチ、幅三十七センチ、長さ一メートル八十センチぐらいのソリで、犬や人間が引いていた。最近では雪の傾斜面を滑降するスポーツあるいはレクリエーションに使われることが多い（このスポーツをトボガニングという）。座って、あるいは腹ばいになって乗り、体でバランスをとったり、両足で操作しながらかじをとる。一九六四年のインスブルック冬期五輪から正式種目になったリュージュと似ているが、リュージュはトボガンより幅が狭く、また仰向けに寝て滑降する。



雪深い地方で歩行用に使われる雪ぐつ。近代的な交通手段が発達するまで、幅広く利用されていた雪ぐつは、今、雪山登山や雪ぐつレースなどに取入れられ、ウィンター・スポーツとして楽しまれている。写真は北極冬期競技大会で走る雪ぐつ競走の選手。



の上を職場まで滑っていく人もあるほど。世界最大の屋内スケート場はバンクーバーにある。さらに氷上で磨かれた平たい石をボーリングのように滑らせてゴールに入れる、または近づけるカーリングも、特にカナダの中西部を中心によくみられるスポーツだ。

カーリング をしたことが ありますか。

ウインター・スポーツ——それは冬の長いカナダの人々が、その冬を精一杯活用し、たいくつをしのぐ生活の知恵である。

氷でできた長さ四十メートルほどのリンクで、ボウリングをするのと同じように平たい石を投げると、滑っていくその石の進路を、両側から二人がかりでホウキ状のものをパタパタさせながら一緒に走る。テレビでご覧になった方も多だろう。これがカナダやアメリカ北部、スエーデンなどで盛んなウインター・スポーツ、カーリングだ。

これは四人一組、二チームで行う競技で、それぞれの選手が三十八ポンド（約十七キログラム）の把手のついた円盤形のみかけ石あるいは鉄（カーリング・ストーン）を標的（ティー）目掛けて投げ、四重丸の線が描かれたハウス（ゴール）に入れあう。一人が投げると、他の一人はコーチ役になり、残りの二人はスト

ンの先を走り、ストーンのコースやスピードに変化をつけてそれをできるだけゴールに近づけるようにするため、ブルーム（箒）で進路をばげしく掃く。

各選手が二個の石を相手チームと交互に投げ、二チームでつごう十六個のストーンを投げ終わると、一イニング終了したことになる。勝敗はどのストーンがゴールの中心に最も近いかで決定する。これを十ないし十二イニング続けて一ゲームが終わり、得点の多いチームが勝ちとなる。

カーリングの歴史は古く、スコットランドで一五一年と刻まれたカーリング・ストーンが発見されている。スコットランドでは、十七世紀頃、カトリック司教が安息日にカーリングをした科で罰されるほど、人々がこの遊びに熱中したといわれている。

カーリングがカナダに入ったのは一七五九年の冬だといわれる。一八〇七年にはモントリオールでカーリング・クラブもできた。現在ではカナダ全国に二千五百以上のカーリング・クラブがあつて、およそ百万人の人々がこのスポーツを楽しんでいる。毎年国内および国際選手権大会も行われている。



北海道と蓼科にも カーリング・リンク

日本へは一九六八年一月、当時ホテル・ピラ蓼科の総支配人をしていた安藤昌彦氏が初めてカーリングを紹介した。同ホテルではルールブックやカーリングの競技方法などに関する冊子を揃え、氷の状態（固くてドライで、平らなのがよい）をみて従業員を中心に楽しんでいるという。また北海道の中川郡池田町では、駅前にある総合体育館構内に屋外カーリング・リンクを作っており、十二月中旬に完成する予定。日本にも小規模（二コース）ながら、本格的なリンクが誕生することになったわけである。

カナダ・スキーの魅力

高野 富美夫

「森と湖の国」という形容がぴったりあてはまる楓のマークの国カナダ。ここ数年、夏冬を問わず、日本人のカナダへの旅行熱は、とどまるどころを知らない。

過去の旅行者数を見ると、一九七二年の五万二千四百三十八人から、一九七三年には七万九千九百五十人に伸び、一九七四年七万七千五百四十三人、一九七五年九万四千一百一十一人、一九七六年十萬六千七百八十三人と着実に伸びている。日本からカナダへのスキーヤーも、この増加率と比例して伸び、一九七六―七七のシーズンには三千人に達した。従来海外スキーと言えば、アルプスのあるスイス、フランス、オーストリアが中心になっていたが、スキーヤーの関心は除々にカナダへと移ってきている。



能だ)——もちろんこういうことが大きな要因であるが、やはりカナダ自体にスキーヤーの心を魅了する何かがあるために、それだけの人気を呼んでいるのである。

日本の二七倍の広さを持つカナダには、主なスキー場だけで七〇近くもある。まず思い浮かべるのがカナディアン・ロッキーマウンテン・スプリングス・ホテルを中心とするバンフ近郊のサ

ンシャイン・ビレッジ、レイク・ルイズ、マウント・ノークウエイ、ジャスパーのマーモット、ベイスン、そしてバンクーバーから二時間のウイステラー・マウンテンらのスキー場は、ロッキーマウンテン位置しているという大きな利点をもっており、ひとつひとつが非常に個性的なスキー場だ。

サンシャイン・ビレッジは、名前のように、スキーをしなくとも楽しくなるような雰囲気を持っており、家族連れのスキーヤーにはもってこいのスキー場。レイク・ルイズは三つの山(ホワイトホーン、テンブル、タミガン)よりなる。コースはすべて林間コースで、それらがリフトで機能的に結ばれ、初心者から上級者まで飽くことのないスキーが楽しめる。マウント・ノークウエイの呼び物は

何といっても完全上級者用の平均斜度四〇度、コブだらけの「ローン・パイン」という名の八百メートルの一枚バーン。

一日に二七回このコースを滑ると、標高差で三万五千フィートかせいだことになり、「クラブ三万五千」というバッジが与えられる。ウイステラー・マウンテンはカナダ最大のスキー場で、標高差は北米のいかなるスキー場よりも長い。

このように、ひとつひとつが非常に個性的であるが、いずれのスキー場の頂上からも見渡されるカナディアン・ロッキーマウンテンの雄姿はまさに圧巻。雪に抱かれたロッキーマウンテンの岩峰群を見ながら滑る心地はまた格別で、これぞカナダ・スキーの醍醐味と言えよう。

ここで忘れてならないのは、ロッキーマウンテンのヘリスキー。カナダのヘリスキーがヘリスキーのカナダかと言われるぐらいで、世界各地で行なわれているヘリスキーの中でも、その機動力、規模も最大。容易に入ることのできないロッキーマウンテンで、腰まであるアスピリンスノーを蹴散らして滑る素晴らしさは、スキーヤーなら一度は叶えたい夢のひとつだ。

日本人にはまだまったくと言ってよいほど知られていないが、東部にも西のロッキーマウンテンに負けないスキー場はある。ケベック州のモン・サンアンとモン・トレンブランがそれである。カナダの中のフランスと呼ばれ、英語よりもフランス語が重きをなしているケベック州では、何から何までフランス的。スキーヤーもフランス系が多く、フランスのスキー場に来ているのではと錯覚するぐらいだ。東部にはロッキーマウンテンのような山脈はなく、西が男性的ならここは女性的な

山並び。剛に対して柔という感じである。西にバンフ・スプリングス・ホテルがあれば、こちらにはシャンプラン城の面影を残したシャトー・フロンテナックがある、というように西と東が面白い対称をなしているのも特徴的。

コースが長く、すいていて、雪質が良く、景色が最高とくれば、スキーヤーにとってこれ以上のものはない。カナダのスキー場に幾度となく行って、その度に感じることは、老若男女を問わず、それぞれが実にうまいスキーの楽しみ方を知っているということである。それぞれが、余裕のあるスキーをしている。神風ばりにコブの上を飛んでいくスキーヤー、ホットドッグやフリースタイルを楽しむのも盛んで、ジープのすそをなびかせて滑る人も多い。スキー技術は二の次、格好は悪くとも強いスキー、これが若者に一般的に見られる傾向である。きわめて自由な感じだ。食事にたっぷり時間をかけ、日光浴をのんびり楽しみ、滑りたい時に滑る。それでも相当の距離が滑れる。それもそのはず、リフト待ち十分というのはめったにないのだから。またスキー場の施設の整っているのにも目を見張るものがある。ちよつとしたスキー場にはほとんどベビシッターがいて、親がスキーをしている間子供の面倒を見てくれる。またチビツ子用のゲレンデも、安全な所に必ず設けられている。リフトはほとんどがダブルかトリプル・チェア。標識もわかりやすく設置されており、まさにスキーヤー天国。

カナダ。おもいっきりスキーを楽しむさせてくれる国だ。(スキージャーナル・エンタープライズ海外事業企画課)

日加を結ぶ

アイスホッケー

テリー・オマリー

最近の日本におけるアイスホッケーの
人気は著しい。一九七二年の札幌オリ
ンピック以来、日本はすでに世界「B」
グループ選手権大会を二回も主催し、今
年は堂々三位に上昇した。ヨーロッパ、



ソ連、カナダなどが
らもたびたびチーム
が来日、ファンに妙
技を披露している。
国内チームも六つ(王
子製紙、西武鉄道、
国土計画、岩倉組、
古河、十条製紙、日
軽金)で、試合ごと
に満員の観衆を集
めている。アイスホ
ッケー人口は小学生
から一般まで約一万
人に達しており、今
後ますます人気は高
まるものと予想され
る。

在京二チームのオーナーでもある堤義明
氏の努力に負うところがきわめて大きい。
日本のアイスホッケーには七〇年の歴史
があるが、それは長い間、企業チーム間
のいわば国内ゲームにとどまっていた。
これを「国際化」したのは堤氏の功績で
ある。堤氏は十一年前、父親の会社を引
き継いだ際、スケート・リンクを三つも
っていた。これをスケートだけに使うの
はもったいないということで、品川スケ
ート・センターでホッケー・チームを結
成した。このリンクでカナダは、ある偶
然から、日本のアイスホッケーと強いき
ずなをもつきっかけを作る。

ある偶然とは——。品川スケート場の
近くには、たまたまスカボロ外国伝導会
(スカボロ教会)があり、そこにかつての
アイスホッケーの名門、セント・マイケ
ルズ高校(トロント)を卒業した若いボ
ブ・モラン神父が住んでいた。一九六六
年のある日、モラン神父は品川リンクで
アイスホッケーの練習を見ていて、仲間
に加えてくれと申し出た。モラン神父は
あとで東京西武鉄道チームの選手として
活躍する——。

モラン神父は宣教活動でも忙しく、そ
してとうとう帰国することになったので、
堤氏は後任を探してくれるよう頼んだ。
モラン神父が推せんしたのが、カナダの
オリンピック・ホッケー選手養成計画の
創立者で、当時その顧問をしていたデイ
ビッド・パウワー神父。

▼モラン神父



パウワー氏が到着し、彼を得た西武チ
ームはめきめき腕をあげて、二連勝をと
げた。堤氏としては、パウワー氏がその
まま西武チームに残ることを希望したが、
パウワー氏は代わりに私をプレイング・
コーチに推せんした。これをきっかけに、
カナダからアイスホッケー選手が続々と
来日するようになる。私が来る前に、オ
ンタリオ州チャサム出身のワカバヤシ兄
弟がすでに日本で頑張っていた。

カナダ日系人を訪ねて

東京女子大学教授 猿谷 要

熊本二世の大蔵次官

まだ九月上旬だというのに、オタワの朝の空気は思わず身体が引き締まるほど冷たかった。しかしグウンタウンの空は信じられないほど青く澄んでいて、その大空の一角を截り取るように、ブレイス・ベル・カナダが建っている。



トーマス・クニト・シヨ
ヤマさんの
オフィスはそ
の最上階の二
十七階にあつ

「やあ、こんにちは」と気さくに声をかけながら、彼は小柄な姿を私たち夫婦の前に現わした。この調子だとこちらも日本語で話せるのかなと思っていると、彼が使った日本語はその一言だけで、明るくて見晴らしのいい部屋に案内されてからは、すっかり英語に戻ってしまった。

初めはいかにもソツのない能吏という感じを受けたが、それだけでは少数派に属する日系移民の僅か二代目で、大蔵次官にまでなるのは不可能であろう。大蔵大臣が何人か交替しても、シヨヤマさんはずっと次官のポストに座り続けているので、いまやカナダの財政関係では最大の実力者、というのがもっぱらの評判なのである。現にちょうど発刊したばかりの「トゥデイ」という新聞が、写真入りでシヨヤマさんの紹介を載せていた。

「私の両親は熊本県の、それも辺鄙な農村の出身ですね。私はまだ日本へ行ったことはないですよ」

とおだやかにいって、彼は笑った。望郷の念に駆られているような気配はまったくなかった。おそらくいま頭のなかは、カナダ財政のきりもりで一杯になっていることだろう。

二世でこれほどその国の人になりきっているというのは、やはり見事なものである。日系アメリカ人の場合も二世にはとくにその傾向が強いが、シヨヤマさんもその典型的なタイプといえるようだ。

建築界のチャンピオン

カナダの建築界でいまトップの座にいたレイモンド・モリヤマさんの事務所をトロントに訪ねたのは、雲が低く街の上を蔽って、かすかに雨がばらついている日のことである。時間が少し早く着いてしまったのに、モリヤマさんは一人で仕事をしながら、私たちを待っていてくれた。



入った瞬間に、私たちは驚いた。建物がなんとも風変わりなのだ。ここに迎えてくれたモリヤマさんの話によると、一九二三年に建てられたという古いガレージを買って改築したものだそうで、玄関のまわりの植込みの感じなどは、どこかに日本の香りを漂わせていた。玄関から仕事場への境には足もとに水が流れているだけで、心にくいばかりの空間がそこにはあった。

外から眺めると二階建てだと思っていたその事務所には、なんと八つものフロアが内にできていて、普段は二十四人も

の人が仕事をしているのだという。事務所の内部じたいが、彼のすばらしい作品だといわなければならない。

ところで、私たち夫婦はモリヤマさんにこのみごとに調和のとれた事務所のなかを案内してもらいながら、この人がすっかり好きになってしまった。私もこんなに人なつこくて、渋味があつて、その上魅力的な中年の男性をめぐつたに見たことがない。彼の方も私たちに好意をもってくれたのだろうか、もうほとんど完成したメトロ・トロント・ライブラリーへ私たちを連れていってくれた。

おそらくこの図書館は、新しく大きな話題を提供することだろう。巨大な建物の中心に共通の空間がすっぽりとできていて、

「孤独感をもたせないような、みんなに共通の感情をもたせるような、そんな図書館を作りたかったんですよ」という彼の説明が、そっくり生かされているようだった。日本を訪ねたとき、飛驒の合掌造りを見て驚歎し、思わず二日間そのなかで暮ってしまったというモリヤマさんは、こういう大きな仕事のなかでも、白人のカナダ人には考え及ばないような、なにかプラス・アルファの要素をにじみ出させていた。

おそらく彼は、父の生れた国の血潮がいまも自分の身体のかなを流れているのを意識しているのではないだろうか。翌日トヨ・タカタさんに案内されて、やはりモリヤマさんが設計したという日系文化会館を訪れ、林にかこまれるような形で建っているその建物を眺めたとき、私は彼の心のなかの一隅をのぞいたように思った。

平原州の日系社会

ウィニベグでは、私が会うことになっていた日系社会の指導者、ハリー・ヒラヤマさんとヨシマル・アベさんのお二人が、空港までわざわざ出迎えてくれた。ヒラヤマさんは土木建築関係、アベさんは食肉業関係。二人とも六〇歳前後の、一世としては若い世代の人びとである。

この二人が中心になって、『展望』という日本語八頁の月報をマニトバ州で出している。日系移民百年記念号は七月五月十六日に発行され、それが第二十七巻第九号というから、ずいぶん長い歴史をもっているわけだ。ガリ版刷りだが、日系社会の消息が詳細にわたって報道されている。たとえばそのなかに、次のような記事があった(原文のまま)。

「百年祭バンクエットと敬老会

日時 五月二十二日(日)午後六時半
場所 インターナショナル イン

テケット 一人八弗五十仙

七十才以上の方々には招待状を発送いたしました。若し洩れて居たら直ぐ安倍氏迄通知下さい。本年は日系人の百年祭で州政府を始め、市長、オタワより生山大蔵次官も列席されますので、一般二、



左からアベさん、猿谷氏夫人、ヒラヤマさん。



レスブリッジの日本庭園。

三世の方々が多く参加下さって、パイオニアの方々に敬意を表する事が百年祭の意義であります。何卒万障御出席下さいませ様に御願ひいたします」

こういう文章をじっくり見ていると、私には海外日系人社会の体臭のようなものが、ひしひしと感じられるような気がする。

ちょうど日本総領事館が新築され、オープンニングのレセプションが行なわれる日にぶつかかったので、ヒラヤマさんの紹介で私たちも出席させて貰った。

「このくらい立派になると、私たちも肩身の広い思いをしますよ」

と建築を担当したヒラヤマさんは、いかにも嬉しそうだった。客が多かったために、佐藤総領事とは少し立ち話をしただけだったが、霞ヶ関やその国の政府の方にはかり頭が向いていて、在留邦人やその国に住む日系人のことなどほとんど念頭がない一般の外交官と違って、この人にはもつと素直な人間らしい温かさが流れているように思われた。

レイモンドの一夜

カルガリーから、大きなレンタカーを貸りて、吐く息がもう白くみえるほど冷えこんだアルバータの大平原を南に走り続け、美しい日本庭園のあるレスブリッ

ジに二泊したが、ここで会った日系の人たちも、私に忘れることのできない印象を与えてくれた。

案内を引きうけてくれたのはロバート・ヒロナカ博士で、この農事試験場に勤めている農業栄養学の専門家。ちょうど奥さんがヨーロッパ旅行に出かけているとかの話で、時間を惜しまず案内してもらったことができた。

最初の日は、夕方からヒロナカさんの生まれ故郷レイモンドへ車を走らせる。レスブリッジからさらに南へ三十分あまり、ここまできるとアメリカとの国境へもう一息だ。レイモンドというのは人口約二千六百人の農村で、ここには今も二百人あまりの日系人が住んでいるということだし、トロントで会ったレイモンド

・モリヤマさんもこの村で生まれ、名前もそのためにつけられたのだそうである。もう引退したオオイシさん夫妻の家に案内して頂く。するとオオイシさんの奥さんは、腕によりをかけて日本料理を作

って待っていてくれた。オオイシさんは今年七十三歳、まだまだ元気で、釣ってきたマスの刺身をすすめてくれた。カナ

ディアン・ウイスキーを傾け、日本料理に舌鼓をうち、日本語で話すオオイシさんの昔話を聞いていると、ふと自分がい

まどこに在るか分らなくなってしまうそうだった。

なるほど、オオイシさんは一九二五年に呼寄せ移民で簡単に入国できたというところを見ると、一九二四年に日本からの移民を拒絶したアメリカの場合よりも、カナダの方が人口が少ないだけに、抵抗もそれだけ少なかったといえるのだろう。

翌日は午後からヒロナカさんの案内で、

オオイシさん(左)と友人のムラキ(セイイチロー)さん。



ウアックスホールにあるカネガワ農場に向かった。一時間あまり広大な農地のなかを走り続けて、防風林のような林にかこまれているカネガワさんの家に着く。おばあちゃんは八十八歳、当主のスタン・カネガワさんは五十七歳で、弟のリチャードさんと一緒になんと九千エーカーの土地をもっているのだという。一エーカーは約千二百坪だから、まあ自分の畑から太陽が出て、自分の畑に太陽が没するといった具合である。現に弟のリチャードさんの家に向かう途中で、私は壮大な落日の光景を眺めた。

「それでもね、戦争中は奴隷のような生活をさせられましたよ。それで発奮してね、それが今の成功の原因でしょうな」とカネガワさんは運転しながらいった。リチャードさんの家には、小さな家ならそのまますっぽり入ってしまうほど広いリビングルームがあって、一同はウイ

スキーを楽しみながら話した。それから二台の車に分乗した私たちは、ブルックスという町にあるカネガワさん兄弟経営のホテルまで食事に出かけた。また三十分あまりのドライブだが、その間中、兄さんの方は日本の歌のカセットを聞かせてくれた。「裏町人生」、「船頭小唄」、「緑の地平線」、「野崎小唄」などといった昔の流行歌ばかりだったが、じつと前方を眺めながら、カネガワさんは陶然としてこういう歌に聞きほれていた。

「何度聞いても、あきるといことがないんですよ。みんな、私の心の歌なんです」
このカネガワさんは、私がそれまでに知っていたアメリカの二世とはまったく違っていた。アメリカの場合は、父の国の日本を忘れ、アメリカ人になりきることが至上命令で、日本の歌を懐しむような二世はめったにいなかったはずだが、それだけアメリカへの忠誠や同化がきびしく要求されたのではないだろうか。カナダでも稀な成功を収めたカネガワさん兄弟を知ったことは、また私に考えさせるたくさんの課題を残したようだ。
ここに紹介したのは、私たちが会った日系人のほんの一部にすぎないし、私たちは日系人だけに会ったわけでももちろんない。しかし私はいま、こういう多くの人たちと、表面的な接触だけではなく、お互い同士心の触れあう友人になれたことを、本当にうれしく思っている。私が好きだと思った人から、自分もまた好かれていると感じることは、人生のもっとも大きな幸福だからである。

『カナダはひとつ』

ディーフェンベーカー回顧録 (第2部)



これは一九五七年から一九六三年までカナダ首相の座にあって権利憲章の成立など、数々の業績を残したディーフェンベーカーの自叙伝三部作の第二部。第一部が首相になる以前のことをつづつていのに対し、第二部は首相時代の政策やできごとが中心になっている。第一部同様、内容はディーフェンベーカーの性格そのままに直截で断定的、パンチがきいていて党派的だ。

一部引用すると――。

「私が内閣に加えた諸君は、私を指導者にさせまいとあれこれ長年にわたって工作してきた連中だ。私は彼らの昔の行動は問題にしないことにした。内閣に入れば、彼らもたくらみをしなくなるだろうと、うかつにも信じたからだ」

「私は生涯の大半を、無知ゆえに選挙のたびに敗戦にいくらかの慰めを見出し、ているような、保守党内のあまり開けない連中と論争することに費やした」



「私の話すところがどこであれ、すべてのカナダ人に話しかけているというのが私の考えだ。全国津々浦々で、私が達成したいカナダ像を描く……。ケベックではこう述べた――『私が約束できるのは、諸君の権利が尊重されるだろう、ということだけだ。諸君はしばしば――あまりにしばしば――平等を否定されてきた。私に関する限り、こういうことはなくなるだろう。』私は『皆さんは素晴らしい人たちだ』なんて言うためにケベックに行ったのではない……。もしバンクーバーやカルガリー、ウイニペグ、トロントあるいはハリファックスで『皆さんは世界で最も素晴らしい人たちだ』なんて言うものなら、聴衆がどういうことをするのか私には分っていた。サイフをもっている人は、まだちゃんとそこにあるかどうか、一人残らず（ポケットに）手をのばすだろう、とね。」

一九六一年六月に訪加した池田首相との夕食会で――。

「彼（池田首相）は、話しながら目の前の皿をじっと見ていた。どの皿も、すみに小麦の束が金彫りされていた。（ちようど対日小麦輸出の拡大について話していたので）彼はこの妙な偶然性にふれた。首相が皿を手にしてひっくり返すと、

『メイド・イン・ジャパン』とあった。……首相ははじめ、ムツとしたが、私もはじめて知ったんだと言うと、彼の態度は変わった。われわれの話合いに、運命というものが入りこんできた。彼が考えたかどうか分らない。ただ、その瞬間からカナダの対日小麦貿易に熱意を見せたのは明らかである。」

また、池田首相が、中国とソ連は国民の伝統や気質が違うため、同盟を長期間続けることはなからう、中国が原爆を開発したら、両共産主義巨大国間の分裂は永久化するかもしれない、と見通しを述べたことにふれ、その洞察力に感心している。

回顧録の第三部は、一九六二、六三、六五年の総選挙を中心に、六七年にディーフェンベーカーが保守党党首を退任するまでのできごとを記している。第三部は十月に刊行された。

ディーフェンベーカー氏は現在八十二才。下院議員として今なお活躍している。

☆ ☆ ☆

ディーフェンベーカー首相が一九六二年に来日した折りに随行したゴラム現駐日公使（当時は、六年間の日本勤務を終えて外務省日本担当の職にあった）は、そのときの思い出をこう述べている。

「飛行機の出発がかなり遅れてしまい、晩に到着するはずのものが、翌朝になってしまった。おかげでとてもきついスケジュールになったが、訪問自体は極めてうまくいき、首相夫妻も心ゆくまで楽しんでた。

ディーフェンベーカー首相は、日本へ向かう飛行機の中で、空港へ着いたら日本語で簡単なあいさつをしたいと希望した。私が適当な語句を二つ三つ首相に

教えることになった。ローマ字で書いて首相に発音のしかたなどを教えたが、中々のできた。ところが、飛行機が遅れたために首相はひどく疲れていて、メガネをどこかにしまい忘れてしまった。そこであいさつをする段になって、私がカードに書いてあげたローマ字がよく読めず、発音も練習のときほどうまくなかった。しかし空港に迎えにきて下さった皆さんに私が事情を説明すると、皆さんも納得し、温かい拍手をしてくれた。

訪問中、私は首相の記憶力に舌をまいたことがある。首相と随員は、太平洋上空の飛行機の中で、東京でやる主要演説を一生懸命用意していたところで、首相は随員すべてと同行の記者に演説のしめくりの部分についてアイデアを求めた。ひとつ選ばれたので、ほかのアイデアは全部捨てられるものだと私は思っていた。ところが、驚くまいことか、大阪で松下の工場を訪れたり、京都で夕食会があったりするとき、原稿も何もない即興のあいさつの中で、ちゃんと前述のアイデアをかわるがわる引用するではないか。とても疲れているときだけに、首相の記憶力には本当に感心させられた。首相は日頃から非常に日本に関心をもっていた。日加関係会議の設立など、現在の両国関係で彼の関心や政策から生れたものも多い。

池田首相との最後の会議が終わったあと、池田首相は壁からすばらしい富士山の絵をはずし、裏に署名してディーフェンベーカー首相に贈った。ディーフェンベーカー首相はこの絵をとても大事にして、自分のオフィスに飾って訪問者があるとよくそれを見せていた。」

ケネス・マクノート著 ● 馬場伸也監訳

『カナダの歴史』

ミネルヴァ書房

竹中 豊

「カナダは今まで無視されてきた。」

一七五八年、ニュー・フランス軍の副官ブガンウイユは、本国フランスを批判してそうつぶやいた。文脈は異なるが、翻ってカナダに関する従来の日本の知的状況を考えてみると、彼のつぶやきはあながち他人事とはいえない。カナダは一見米国と地理的にも時代的にも類似していることから、しばしば薄められたアメリカとして皮相的に一蹴されがちであった。

この度出版されたマクノートの「カナダの歴史」(The Pelican History of Canada)はそのギャップをうめるがごとく、カナダの過去を理性的に掌握した絶好の著といえる。カナダ史を扱った邦語の文献は、これまでも散見された。しかし質量ともに、一九七六年までも扱った単行本としてのカナダ通史は、わが国では初めてである。

さて、歴史家が歴史をつくりあげる。従って歴史を研究する前にまず歴史家について知らねばならぬ、とはよく聞く言葉である。カナダ史の場合、これはより一層真実である。従来よりカナダ史は、

仏系史家と英系史家によって書かれてきている。その結果、厳密な意味で一つのカナダ史はありえず、「仏系カナダ史」と「英系カナダ史」との二つのカナダ史が存在しているのが現実である。そして大まかにいって、前者のカナダ史にはケベック・ナショナリストとしての、又、後者のものにはカナディアン・ナショナリストとしての傾向が内在している。

マクノートは言うまでもなく英系史家であり、この「歴史」の中にもそうした色彩がひそんでいるのは、いわば当然かもしれない。例えば、本文三六三ページのうち、カナダ史の三分の一以上を占めるフランス統治時代は、わずか二八ページで片付けられている。

しかしそれは特に非難すべきことではない。むしろ歴史的事象に関し、重点の置き方の差があることを一応念頭に置いて読むと、全体としては、より冷静な筆致で描かれていることに気づく。

そこでカナダ史学を英系史家に絞って考えてみると、彼らに多大な影響を及ぼしてきているのは、トロント大学を基点とした歴史家達であろう。インニス、マツキニス、ローワト、クレイトン、ケアレスをはじめとして、マクノートもその代表格である。しかも後の三人は生粋のトロント人である。勿論、各自の視点は異なり、一定したトロント学派なるものを形成している訳ではない。だが敢えて彼らの共通点をあげれば、それはカナダ史の西部よりもオンタリオを中心とした東部志向型の史観にあるといえなくもない。従ってマクノートの論述も、アツパシ、ローワト両カナダの統一の頃をはじめとして、コンフェデレーション成立前

後の時代に関しては、ことさらにその筆が冴えている。政治力学的な動きが詳細に展開されており、一九世紀カナダは、マクノートの「歴史」のまさにハイライトといえよう。

他方、カナダ史がいかに米国史と根本的に異質であるかは、彼の次の言葉に要約されているといつてよい。「カナダの

カナダ大使館図書室案内

- 「医師ノーマン・ベチューンの偉大なる生涯」(T・アラン、S・ゴードン共著、浅野雄三訳、東邦出版社)
- 「世界の地理教科書シリーズ4 カナダ―その国土と人々」(トムキンズ、ラウト、ヒンセント、ウオーカー、ラスト共著、山口岳志訳)
- 「日本の移民―日系カナダ人に見られた排斥と適応」(新保満著、評論社)
- 「フランス系カナダ問題の研究」(伊藤勝美著、成文堂)
- 「オーカミよ、なげくな」(フーレー、モワット作、小原秀雄、根津真幸共訳、紀国屋)
- 「イギリス(系)カナダ文学史概説」(カナダ研究シリーズ第九巻第一号)(コンラッド・フォルトン著、上智大学カナダ・センター)

社会・政治上の基本姿勢が、カナダのあちこちに存在するフロンティアでの経験から生まれたものである(アメリカ合衆国のフロンティアに関して断言されたように)と立証することは、たしかに不可能である。」(二一九―二〇ページ)(傍点筆者)。カナダ史には米国への併合の危惧、及び南の強国(あらゆる意味で)

に対する警戒心が常につきまとっていた。従ってカナダの知的伝統の中には、一種独得な反米主義が潜在しているとしても、不思議ではない。マクノートを注意深く読むと、米国主義の過剰に対する懸念、及びカナダ主義への意欲を窺い知る事が出来よう。

邦訳に関しては、訳者達の配慮により各章中、原著にはない小見出しがつけられており、非常に読みやすくなっている。しかし邦文に関しては、若干疑問に思える箇所も少なくはない。例えば一七世紀のニュー・フランス時代に新教徒は植民地定住に「厳しい制限を受けた」(二二ページ)(傍点筆者)とある。だが史実と原文から判断して、定住の「制限」ではなく実際には「締め出し」なのではあるまいか。又「修道士ジャン・モンズ」(二二ページ)は誤りで、「修道女ジャンヌ・マンス」である。カトリック色の強い仏系カナダに関する所で、一部を除き頻繁に「牧師」「カトリックでは使われぬ用語」としているのも誤解で、「司祭」あるいは文脈により「聖職者」としたい所である。さらに「チャールズ二世」(二三ページ)は、「チャールズ二世」が正しいが、これは印刷のミスということである。

とはいえ、これらはマクノートの本質、及び訳者達の尽力を決定的に損う程のものではない。同書がカナダ史研究の基本書であることには、誰も異論がないであろうからである。(文化学院講師)(日本カナダ研究会「ニューズレター」より転載)

近刊予定

リックカー、セーウエル著、馬場伸也監訳「カナダの政治」(ミネルヴァ書房)

